

箱根山地におけるニホンカモシカの撮影記録

永田幸志*,**・永井広野*,***・町田直樹****

Koji Nnagata*, Koya Nagai*,***, Naoki Machida****

1 はじめに

ニホンカモシカ (*Capricornis crispus* 以下カモシカ) は、特別天然記念物に指定されており、神奈川県レッドデータ生物報告書 (神奈川県立生命の星・地球博物館 2006) により準絶滅危惧種に分類されている希少動物である。神奈川県におけるカモシカの生息状況については、限られた報告ながら、丹沢山地における柴田 (1964) による目撃記録の記載や、永田ら (2007、2018) がニホンジカ (*Cervus nippon* 以下シカ) の生息密度調査の際に目撃したカモシカの個体数から算出した生息密度の報告等の記録がある。

一方、箱根山地については、カモシカは江戸時代には生息していたと推察されるが (神奈川県立生命の星・地球博物館 1995)、伊豆では 1922 年までに狩猟圧で絶滅したとされており (常田 2019)、箱根町以南から伊豆半島にかけては、近年の確実な生息情報は得られていないことから (環境省自然環境局生物多様性センター 2019)、この地域の個体群は絶滅したものと推察されていた (關 2022)。

ところが、2017、2019 年に箱根町南部に設置した自動撮影カメラにカモシカが撮影され (關 2022)、カモシカが箱根山地に定着している可能性が指摘された (關 2022)。他方、自然環境保全センターが箱根山地においてシカの生息状況把握のために実施している自動撮影カメラ調査でもカモシカが撮影されたことから、生息状況の基礎資料とする

ため報告する。

2 調査地域

調査は神奈川県小田原市 (久野)、南足柄市 (明神ヶ岳周辺、三竹)、箱根町 (明神ヶ岳周辺、宮城野) で実施し、3 次メッシュ (約 1 km 四方) 単位で、25 メッシュを対象とした。(図 1)。

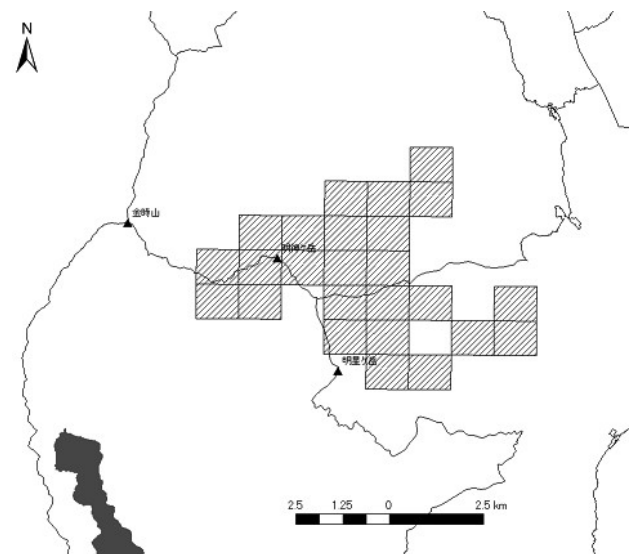


図1 カメラを設置した3次メッシュ

3 調査方法

森林管理者の承諾を得る等必要な手続きを経て、調査地域に自動撮影カメラ (ハイクカム SP2、BMC

* 神奈川県自然環境保全センター自然保護公園部野生生物課 (〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 657)

** 現所属 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課 (〒231-8588 横浜市中区日本大通 1)

*** 現所属 神奈川県西地域県政総合センター森林部水源の森林推進課 (〒258-0021 神奈川県足柄上郡開成町吉田島 2489-2)

**** 神奈川県西地域県政総合センター森林部林道課 (〒258-0021 神奈川県足柄上郡開成町吉田島 2489-2)

SG560K-12mHD等)を2018年2月に小田原市・南足柄市内に90台設置し、2018年12月に箱根町・南足柄市内に35台を追加設置し、2022年1月まで継続設置した。ただし、調査期間中にカメラ設置個所で森林整備が実施されたため、一部カメラは撤去した。カメラは、3次メッシュ内の公的管理森林の中に、なるべくランダムに配置した。1メッシュあたりの設置台数は5-10台程度であった。カメラの設定は表1に示すとおり動画での撮影とし、設置高さはイノシシ等の野生動物からの接触を避けるため、地上高約0.5m以上とした。撮影された動画ファイルは定期的に回収し、カモシカが撮影された日時と個体数を動画ファイルごとに記録した。ただし、1分以内に連続して撮影され、明らかに同一個体と判断できる個体が撮影された複数の動画ファイルは、まとめて1つの動画ファイルとみなした。カモシカは角の形状や顔の模様等から個体識別が可能とされていることから、今回の撮影個体のうち頭部全体が撮影さ

表1 カメラの設定条件

設定項目	設定
モード	動画
センサー感度	中(調査地点により低)
解像度	HD(720p)
ディレイ	無し
撮影時間	10秒

※2018年11月まではディレイ10秒、撮影時間1分

れた個体について、角の形状および顔の模様を元に個体識別を試みた。

4 調査結果および考察



図3 識別が可能だった個体

1: 左角が根本から折れている、2: 左角の先端が折れている、
3: 角折れがなく顎下の毛が黒い、4: 角折れがなく顎下の毛が白い

2018年2月～2022年1月までの撮影期間中、カモシカは25メッシュ中9メッシュ(図2)の12地点で、累計25回、26頭が撮影された。4地点については複数回の撮影があった。同時に2頭の撮影があったのは1回のみで、その他は1頭の撮影だった。撮影された個体のうち幼獣と判別できた個体はいなかった。市町村別に集計した撮影頭数は、小田原市

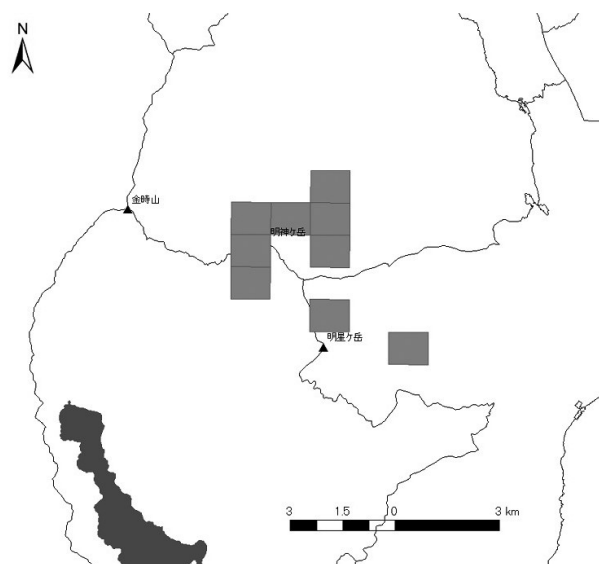


図2 カモシカが撮影された3次メッシュ

内8頭、南足柄市内16頭、箱根町内2頭であった。頭部全体が撮影された個体の角の形状および顔の模様から、4個体の識別が可能であった(図3)。

今回の調査結果から、關(2022)による2017年、2019年の撮影記録と同時期に、5kmほど離れた複数地点で複数個体のカモシカが確認されたことになるため、關(2022)が指摘するように、近隣の他地域から特定個体が一時的に移動してきたとは考えにくく、箱根山地に定着していると考えられた。

本県におけるカモシカの行動圏は不明だが、カモ

シカの同性同士はナワバリ（排他的な行動圏）を形成し、行動圏が重複しないため（文化庁 2022、岸本 1996）、群れを形成するシカのように高密度化するとは考えにくく、丹沢山地においても低密度で分布していると推測されている（永田ら 2018）。本カメラ調査においても、撮影のあった地点、撮影頭数共に少なかったことから、生息密度は非常に低いと推測される。本県におけるカモシカの生息状況に関する情報は非常に少ないため、今後も生息状況に関する情報収集を続ける必要があると考える。

5 謝辞

本報告は、委託調査で得たデータに基づくものである。調査では、株式会社野生動物保護管理事務所、株式会社CTI リード、新日本環境調査株式会社の担当者にはお世話になった。関係各位に厚くお礼申し上げます。

6 文献

文化庁文化財第二課 (2022) カモシカ保護管理マニュアル (改訂版) . 191pp.

- 神奈川県生命の星・地球博物館 (1995) 神奈川県レッドデータ生物報告書 2006. 257pp
- 神奈川県生命の星・地球博物館 (2006) 神奈川県レッドデータ生物報告書 2006. 442pp
- 環境省自然環境局生物多様性センター (2019) 「平成 30 年度中大型哺乳類分布調査 調査報告書—クマ類 (ヒグマ・ツキノワグマ)・カモシカ」. 67 pp
- 岸本良輔 1996, ニホンカモシカ. 日本動物大百科. 平凡社 : 106-111
- 永田幸志・羽澄俊裕・瀧井暁子 (2007) 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度. 丹沢大山総合調査学術報告書 . 163-164
- 永田幸志・谷川潔・町田直樹 (2018) 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度. 神奈川県自然環境保全センター報告 15: 51-53.
- 柴田敏隆 (1964) 丹沢山塊の哺乳動物. 丹沢大山学術調査報告書 : 340-343
- 關 義和 (2022) 神奈川県箱根町におけるニホンカモシカの初撮影記録. *Wildlife and Human Society*10:21-25.
- 常田邦彦 (2019) カモシカの保護管理に関する研究. 早稲田大学審査学位論文 . 428pp